「ありがとうございます。しかし、わたしには遠い日本の国へ行って人々に仏の教えを説くというつとめがあるのです。」

それからも、鑑真一行には何度も何度も苦難がふりかかった。十年あまりの間に五回も日本行きを計画したが、全て失敗してしまった。五度目の航海では、あらしのために十四日間も漂流し、沖縄よりはるか南にある海南島に流れ着いたのだった。

海南島からもどる途中、日本から来た僧の一人栄叡がなくなった。

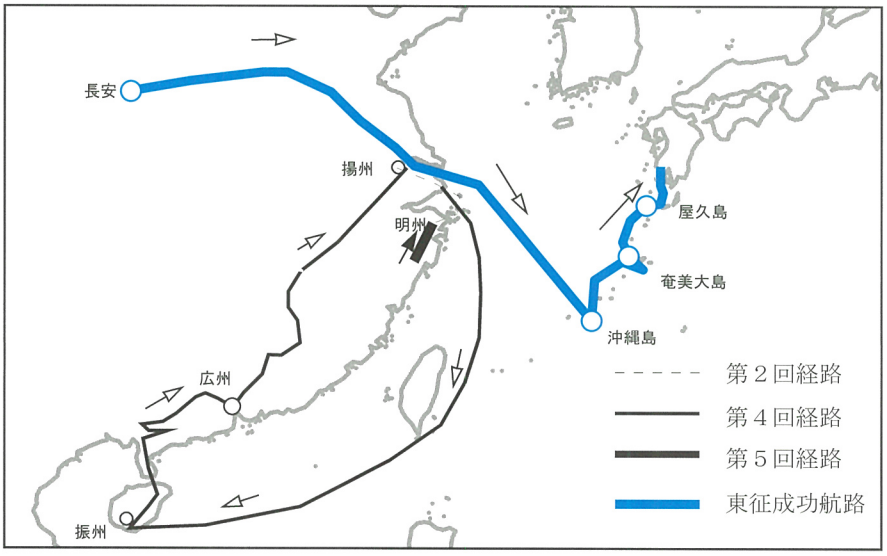
「栄叡、あなたといっしょに日本へ行きたかった……果たせないまま、あなたを死なせてしまった……。」

失意の鑑真に、暑さと疲労がさらに追い打ちをかける。とうとう、鑑真自身も病のために視力を失ってしまった。

それでも鑑真は、決してあきらめることはなかった。

初めて鑑真が日本行きを計画してから十年がたった七五三年、遣唐使（日本から唐へ送られた使いの人々）がもどる船に乗って、鑑真たちは日本へ向けて六回目の出航をしたのだった。あれる海の中、やっとのことで鑑真を乗せた船は薩摩の国（今の鹿児島県）にたどり着いた。そして、七五四年一月、とうとう鑑真は奈良の都、平城京に到着した。日本へ行くことを決意してから十二年目のことだった。

鑑真が渡日した経路



「唐大和上東征伝」より

鑑真をむかえた当時の日本の人々、朝廷の人たちだけでなく一般の民衆からも大変とうとばれながら、鑑真は十年の間、仏教の教えを広めた。また、それだけでなく、中国の最新の医薬などさまざまな知識も伝え、まずしい人々を助けるためにも力を尽くした。

七六三年五月、鑑真は西の方を向いて座ったままなくなったと伝わっている。鑑真がなくなる少し前、弟子たちは鑑真の姿を写し取ろうとして像をつくったそうだ。その像は、一二〇〇年以上の時をこえ、今も唐招提寺に残されている。それが「鑑真和上坐像」なのだ。

今も、鑑真を慕い、鑑真の行いを決して忘れまいとする多くの人々が、唐招提寺を訪れている。

○　平城京に到着したとき、鑑真はどんなことを考えたでしょう。

○　鑑真が日本にたどり着くことができたわけを考えてみましょう。

鑑真和上坐像　　撮影：飛鳥園

奈良県教育委員会
http://www.pref.nara.jp/18608.htm/